

編集後記

早いもので、私が平成 18 年豪雪の名残をまだ感じさせる秋田へ着任してから 4 年が経ち、雪氷学会員になってからも同じ月日が経過しました。前職の海洋研究開発機構時代は組織的なプロジェクト研究の中で研究に専念できたのと対照的に、昨今の地方大学の教員は授業（教員の定数削減、不補充により負担は増えつつあります）は言うに及ばず小中学校等への出前授業、有形無形の「地域・社会への貢献」という美辞麗句に飾られた雑用、学内各種委員会、徒勞で不毛な「ムラ社会」的な組織内外の調整等等様々な業務が目白押し、「どうぞお好きな研究を！」と言われても時間もカネもないという、皆さんよくご存知の状況なものでした。しかし、地方大学なりの希望もあります。一つは、雪氷・気象の研究フィールドとして大変魅力的な環境があること（秋田の場合、積雪があることと山や森がすぐ身近にあること）です。おかげで、休日や空き時間を見つけては、何かにつけ「そこへ行き、まず見て（測って）みること」が可能です（昨日も快晴だったので早朝から夕方にある学生さんの発表までの半日で八幡平の残雪上での放射観測に出かけました）。これはまた、私が十数年来こだわっている東北 6 県における積雪分布の時空間変動を研究する上での強い動機付けにもなっています。もう一つは、研究者ではない大量のシロウトさん＝学生の存在です。正直なところ、昨今の学生さんはサークルにバイトに忙しくあまり勉強しませんし、打たれ弱く、研究や学業全般のモチベーションもまあまあと言ったところですが、その学生さんが雪氷・気象のことに関心を持ってくれたり、極々まれには私が思いつかないような自由な発想を研究・学業でも開花させたり、ということがあるとなにかうれしくなっ

ています。「ウザい位に関わるけれど、面倒もみるよ」というのを学生さんを指導する際のモットーとしている私ですので、（本当は良くないのですが）金欠で実習や学会に行けない学生さんをみるとつい財布の紐が緩んでしまいます（独身ならではの特権かも）。私の研究室では全員が雪氷学会各支部で実施する積雪観測会の類に一度は参加する約束になっており、今年、就職活動で東北支部の講習に出られないという学生さんには、餞別を預け北信越支部および関東・中部・西日本支部共同主催の講習へ行ってもらいました。本人が帰ってきてから、私が「せっかくだから、有名な上越の豪雪地帯、雪崩防止施設を見学した報告を是非お願いします！」と言ったところ、学生さん曰く「すいません。山道で（車に）酔っちゃって、ほとんど見られませんでした。」と大変素直なお返事が返って来ました（これが現実です）。それでもやはり、若者には今しか出来ない経験をやるチャンスを逃して欲しくないと願っております。ところで、現在私がいるところは冒頭のような厳しい状況に加え、地方の教員養成系学部ゆえの難しい問題があり、いつまで持ちこたえられるものかという心配もあります。このため、春が来れば雪が融けるように当地から私が消えて無くなる日もそう遠くはないのかもしれませんが、それでもそれまでのしばらくの間、立地を生かした独創的な研究に取り組むほか、学生さんのお手伝いも行ない、さらには微力ながら雪氷学会や「秋田雪の会」などの雪氷有志に何らかの貢献ができればよい、と願っております。最後までお読みいただき、ありがとうございました。

（秋田大学教育文化学部 本谷 研）